

～懐かしい馬車～

現在、町史「産業編」では戦前の馬車運搬や畜産等について調査しています。その中で「ぜひ、馬車の写真を撮りたい!」ということになり、町内でずっと探していたところ、幸地の翁長安雄さんの紹介で念願叶い、ついに撮影することができました。馬車の所有者は幸地の与那嶺安正さんで、撮影当日はユーモアを交えながら馬車



与那嶺安正さんと愛馬

の説明をして下さいました。

幸地は戦前から畜産が盛んで馬を飼っている農家が多くコーチーミンマー（幸地雌馬）という異名があるように雌馬が殆どだったそうです。雌馬が多かった理由には幸地は地盤が緩かったので、体が大きく脚の長い雌の方がぬかるみでの運搬、農耕には適していたからだそうです。また、馬の種類としては雑種や宮古馬が殆どだったそうです。

では、与那嶺さんの馬はというと、ブルトン種の父親とモンゴル馬の母親の血を引く1歳半の美しい雌馬です。人間でいうとまだ子供だそうで、馬車に関しては訓練中のことでした。また、馬車の用途についての質問に対しては、「車ではスリップするような所で使いますよ。」という答えが返ってきました。なるほど、どんなに車が発達しても馬車じゃなければ、運搬できない場合もあるのですね。

今回の撮影では、馬の美しさと優しい瞳にただうっとりするばかり。「馬車の訓練が終わったら、乗せてあげるからね。」という言葉に思わず感激してしまいました。西原の町を馬のひづめがパッカ、パッカと鳴り響き、悠然と歩する姿が見られる日もそう遠くないことでしょう。その日が来ることを楽しみにしています。



今では珍しくなった馬車鞍